

# 民族舞踊文化



No.1

昭和63年 3月25日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F 電話03-583-3633(代)



▲新春の宴 江戸英雄当財団理事の音頭で乾杯（昭和63年1月7日）

▶ 昭和61年 3月25日 財団許可の日



## 財団の設立

## 黛 節子

黛節子は「ピアニストにさせたい」と願う母の希望で、教則本ももてぬ頃からピアノの勉強をさせられました。でも私にとってそれは最大の苦痛であった為、母も諦めねばならない結果となりました。その代わりとでもいうのでしょうか、体の弱かった私に百八十度の転換と思われる日本舞踊を始めさせました。私は水を得た魚のように、スイスイと泳ぎ、自分で驚くほど前進、前進の連続でした。

事実、私は踊りが好きだったのです。しかしそのうちに、いわゆる日本舞踊だけではあきたらなくなりました。

これでいいのか？ どうしたら生きた踊りが踊れるのか？ 自虐と疑問の連続でした。

丁度そのとき、日本青年館で催された民俗芸能（その頃は郷土芸能とっていたかも知れません）を見る機会を得ました。民俗芸能の持つ発散度の高さ、体の使い方から表現するテクニックの面白さ、意表をつく表現、私はすっかり魅せられ民俗芸能の勉強に突っ走りました。

私は民俗芸能を素材とした民族舞踊家になろうとその時決意したのです。

それから北は津軽から南は沖縄、南西諸島まで遮に無に取材とテクニックの勉強にでかけました。音楽もコスチューム、テクニックも全てを一つの素材、元素と考えた私だったのです。一つの土地の踊りを獲得するまで、何度でも通いました。そしてきちんと把握すると次は自分の中から自然に醸酵するのを待ちました。そして表現しました。何年となくそうした天職（私はそう考えています）に身をゆだねているうちに現地に残って

いる民俗芸能には日本人祖先の祈り、苦しみ、悲しみ、喜びがこめられていることに気がついたのです。これは専門家の手によって解説し、継承しそれを更に発展、振興へと切り開いてゆくべきだし、今のままでは単なる観光用民俗芸能に終わってしまうように思われるようになりました。

今やらなかったら、いや今でも遅いかも知れませんが、だれかがやらねばならない大切な事業なのではないでしょうか。

この心は私の中で大きくふくらむばかりでした。私は命かけてやりたい。けれど、どんなに情熱と努力する心はあっても、個人の力は知れています。でもそれをやらなかったら、私は舞踊家として何のために生まれ、これから生きてゆくのでしょうか？

以上のようにさまざまな想いにかかれ苦しんでおります時に、皆様のお勧めもありましたので財団設立を想いました。

財団という力のバックなしでは、この大切な行事をやり遂げることは出来ないと信じていますし、私一代で出来なくても財団は永遠に日本民族の残した舞踊文化を磨き完成していつくれると思うからです。

この仕事は「民族の踊りの神々」からの揭示と感知している私です。

以上のような動機で財団申請致しましたところ、幸いにも文部大臣より許可を受けることが出来ました。（昭和61年 3月25日）

「黛民族舞踊文化財団」として民族舞踊の進歩・発展を永続できますよう皆様のお力添えを偏にお願い申上げる次第でございます。

遙か東の天末線には。  
ひよろひよろの棕櫚が並んでるが。  
あれはユーフラテスの川岸である。

堅い土丘群。  
ウル。

北と西と南は漠漠のシリア沙漠。それに大ネフェウド  
沙漠がつづく。

熱沙に陽炎もえ。  
太陽は黄塵にけぶる。

ウル。

ここにシュメールの神殿があった。  
キリスト生誕より二七〇〇年も前に（幻でない）。  
人間のつくった大伽藍があった。

王は最高の神官である。

神殿は政府であり軍であり経済のルツボであった。  
軍旗をたてた戦車が神殿のなかから出てきた。  
戦車は砂煙をたてて地平の彼方に消え。群衆は沸いた。

神殿の奥まった一室には牡鹿。牡牛。山羊。  
ガゼル羚羊などの黄金の動物が群がり。銀の燭台が並  
び。

王妃は楽人の奏でる豎琴にききいりながら黄金の杯で  
酒をのんでた。

その首飾りの瑠璃。紅玉髓。銀。黄金。  
その髪飾りの金のロゼットは虹色に光り。  
侍女たちの舞ひはいつまでもつづく。

沙漠の天には。  
むらさきの満月。

## 伝統芸能の甦り

鶴岡八幡宮宮司 白井永二

## 祝 辞

文部省教育助成局長 加戸守行  
(前文化庁次長)

発会以来御無沙汰いたしておりました。この度機関誌の刊行の旨お知らせを受けまして、御活躍、御発展のこと誠にめでたく存じます。

伝統芸能に活力を増幅する黛先生の御活動には何時も敬服いたしております。

さて、私はこの秋、美しい紅葉のなかで、青森県八戸市の霏（おがみ）神社に伝わる南部神楽、秋田市内の神社が伝える霜月神楽を拝観する機会がありました。秋田のは古態の狂言を留めているかと推察される問答があつて、面を掛けて神話を語っていましたが、テンポの早い囃子に合せて語り手は鳥跳びの仕草で座に立ち、交互に進退するのは著しい特徴に見えました。

いずれにしても二つとも囃方は東北地方、殊に道の奥に顕著に伝承され分布している山伏神楽、法印神楽であることは間違いなく、その囃子の調子は何時見ても聞いても心の曳かれるものでありました。すりがね、ちゃりと太鼓、笛のリズムに舞手だけでなく私も載せられていました。何時ものことですが指先が遊び、足もとも連動しているのです。気がついてこれこそ「神遊び」の本然の有り様だと考えながらひそかに嬉しさにひたっております。人の声が立ち始めて私は神の代から引き戻されました。

民族の血でしょうか。祖先の心が甦って来るのでしょうか。人間の人間である性なののでしょうか。

悠久の歴史の流れを拵めつつ生き続けている伝統芸能の伝承は近頃再び息吹きを強めているように思えます。新しいものを加えて古いものが甦り、再び新しい流行を繰返し、古くは同根であったものが、遠く離れて別々に生きている事実を思うと黛先生の御為事に期待するところが益々大きくなって参ります。

今日はすばらしい会にお呼びいただきましてありがとうございます。

私とこの財団との関係は、じつは昭和58年にさかのぼります。当時、文化庁次長をいたしておりまして、そのおり黛節子先生から私財をなげうって財団を作りたいとお話がありました。民族舞踊にかける先生の情熱にうたれまして、何とか在任中に財団の設立ができたことをうれしく思っております。

この七草粥の会にずっとお招きいただきながら、いつも仕事とぶつかって参れませんでしたけれど、今日はほんとうにタイミングよく参加させていただき、子供の頃を思い返して何十年ぶりかおいしい七草粥を食べさせていただきました。おかげで文部省も今年はすごい運勢が開けるだろうと思っております。

仕事の話で恐縮でございますけれども、文部省として今何を一番心配しているかと申しますと、これから育つてゆく日本の子供達が、心を持たない日本人になってゆくのではないかと申しております。その意味におきまして、当財団の黛先生をはじめとして、日本の心、世界の心、失われかけているものを取り戻そうとされている必死な御努力に、私は深い敬意を表したいと存じます。多くの日本の方々が、この民族舞踊をはじめとする文化の心をもって文化を愛する日本人になっていただくことが、世界の中で叩かれている日本の地位をまた取り戻すことになると思っております。そのために、こういうことを申しあげて失礼ではございますが、黛先生もお年にならずともっと元気で頑張ってくださいと思いますし、この財団の発展されますことを、創立に関係した一員として心からお祈り申しあげる次第でございます。ほんとうに今日はありがとうございます。

(昭和63年1月7日「七草の宴」にて)

# 雲南訪問

多彩な糸を卷いた芋環が踊るように転がって来て私の前でとまった。鮮やかで美しいものであった。

昭和59年5月日中文化交流協会が「中国文学芸術界連合界代表团」を招請した。その一日、一行は黛民族舞踊を黛アートサロンで見学したが、その訪日団の一人に雲南省歌舞団演出家・周培武先生がおられた。先生は雲南省各地に点在する少数民族の民族舞踊の取材、研究、保存につとめられる一方、それらを専門舞踊家の手によってどのように近代化し普及するかを目標とした活動をしていらっしやることである。これをうかがったとき、私は、考えを同じくする友が中国雲南省にいてくださったと、大きな驚きと喜びを覚えた。「黛先生は雲南の少数民族の舞踊を取材研究する希望がありますか？」との問いに、「もし行けるなら、日本民族舞踊家としてこの上の喜びはありません」と、そくぎに私は答えた。

しばらくして雲南舞踏家協会から正式な招待が届いた。こうして日中舞踊の友好がはじまり、年毎に往復をくりかえして互いに自国の民族舞踊の発展に協力することを目標に、永年交流を双方確認したのである。

美しい芋環の夢は、このような民族舞踊交流の吉兆だった。

最初の訪中では昭和60年4月5日～15日、タイ族の水かけ祭、新節（タイ族の正月）を主として見た。水かけ祭は、「ボーシェイジェ」といわれ、シーサンパンナ（西双版纳）で行われる。この祭は、タイ族の人々が新節すなわち正月に、旧きを送り新しきを迎える伝統的祝祭で、タイ暦6月（太陽暦の4月）、田植えの終わったあと、雨季の前に行われる。タイ族の人々の害を除くという12人の娘たちを祭り、災害や病魔から免れることを



59年5月  
黛アートサロンにて  
周培武先生



サニ族の踊り

祈り、家畜の安全豊年満作を願って互いに水をかけあう。水は災いを去り、福をもたらすものという。新節といっても気温は毎日38度を越え、日本の寒い正月に慣れた私達には、もうひとつピンとこない。かけられた水は暑さですぐにかわいてしまう。しかし、その祝日に、少数民族がそれぞれの民族衣裳を身につけて町を歩く姿はとても華やかで色彩豊かな風景だった。

私達の第一の目的はジノー族の民族舞踊だったが、劉金吾副主席のはからいで私達のホテルに来ていただき、太鼓の踊り、糸つむぎ唄などをゆっくり取材することができた。夜には、シーサンパンナのテレビ局が、景洪劇場（一番大きく設備もよい劇場）で少数民族の舞踊をビデオ録画することになっていて、それに便乗させていただいた。

ジノー族に葬儀の踊りというのがある。日本の葬式の色は白と黒だが、これは赤い布を用いる。長年月を生きて人のために尽くしたことに対する感謝の心を赤の色で表現するとのことであった。

竹の踊りというのを見た。フィリピンの竹の踊りに似ている。

また、ヤオ族の「我が愛す一朵の花」という踊りがとても印象深かった。一人の男性が、一朵の花と一顆の鈴を手に持ち、この鈴の音だけで踊る。ヤオ族の男子は14歳になるとこの踊りを習得することになっているという。

ほかに石林、昆明民族博物館を見学し、講演を行い、多くの楽しい思い出を残して、劉副主席、周培武先生ほか多くの方々のお見送りをいただいて帰国の途についた。



タイ族新節祝賀パーティー。  
ジノー族の副州長、何貴氏と。



シーサンパンナ歌舞団の  
団員と共に。



曼延佛寺で、お寺の長と。



# 雲南舞踊家の訪日

61年5月23日

鶴岡八幡宮舞殿にて。奉納舞「静」を踊る黛節子。

財団設立後最初の事業として、雲南の舞踊家をお招きし、日本の民族舞踊研究、相互の民族舞踊交流、セミナーなどを行った。来日されたメンバーは劉金吾氏（中国舞踏家協会雲南分会副主席）、刀美蘭氏（雲南省歌舞団独舞舞踊家）、李政氏（紅河州歌舞団振付け演出家）、馬文静氏（昆明歌舞団振付け演出家）の皆さんである。



セミナー。  
李 政先生による茶碗の踊り。  
黛節子共演。

昭和61年5月20日、成田空港で感激の再会をはたし、その夜は黛アートサロンで歓迎レセプション。財団役員の方々にもご出席いただいてにぎやかに歓談した。余談ながら、この宴の料理の一品に日本のちまきをお出ししたところ、タイ族の刀美蘭女史、大変気に入って召し上がった。ちまきはタイ族の正月の御馳走のひとつである。

21日、一行は駐日中華人民共和国大使館、文化庁長官三浦朱門氏、加戸守行次長を表敬訪問。

22日、黛アートサロンにおいて日中民族舞踊文化交流公演を行った。訪日団の皆さんがそれぞれタイ族、イ族などの民族舞踊を披露され、黛節子が「でいごの祈り」を、黛節子と舞踊団が、「豊年舞」を踊った。

23日、鎌倉鶴岡八幡宮に一行をお招きして、境内舞殿において黛節子が「静の舞」を奉納した。

24日、「ライス・ロードと舞踊と文化」と題して日中民族舞踊文化交流セミナーを開催。国立民族博物館教授の藤井知昭氏に司会をしていただき、劉金吾氏と黛節子が講演を行った。

25日、神奈川県三浦三崎に伝わる民族芸能「チャッキラコ」を一行と共に現地取材。

28日、玉川大学文学部芸術学科において身体表現、舞踊論な



鶴岡八幡宮の奉納舞の記念撮影。



鎌倉の森耳氏の記念碑の前で。

どの授業を参観。民族舞踊交流を行った。

30日、日本映画学校（校長・今村昌平氏）を訪問、授業参観と民族舞踊交流を行った。そののち、黛アートサロンにおいて今回の訪日の打ち上げパーティーを開き、別れを惜しんだ。

31日、近い再会を約し、一行は成田空港から帰国の途につかれた。わずか12日間と短い日程であったが、充実した滞在を楽しんでいたのだと思う。

日中民族舞踊文化交流公演。  
雲南省舞踏家協会訪日代表团。

さよならパーティー。  
劉金吾氏と黛節子。



# 雲南再訪

62年 7月12日  
昆明、歓迎パーティー。

昭和62年7月12日から23日にかけて中国雲南省を再訪した。今回は同省路南県石林でサニ族の火把節を見ることが第一の目的である。

7月12日、到着の夜、雲南省文学芸術連合界の楊文翰先生主催で私達の歓迎パーティーをしていただいた。

12日、午前9時30分雲南を立ち思茅<sup>ホーパオ</sup>へ向かう。正午過ぎ思茅に着き、ただちに車でシーサンパンナへ。夕方6時到着。2年前に別れた、懐かしい人々と風景に再会した。夜、ジノ一族副州長何貴氏と会見。ジノ一族についていろいろの話をうかがった。

14日、朝8時30分ジノ一族の村へ出発した。この村へ外国人が行けるようになって我々が最初の訪問者とのことである。前回訪中のおりシーサンパンナでお会いした人達の多くに村で再会、お互いに手を取り合って友情を暖めた。村には立派な公民館があり、そこで、早速に「太鼓の踊り」「竹筒の舞い」「竹



ジノ一族の村。

竿舞」という踊りを見せていただいた。踊りの中に歌詞がはいっている。その意味を何桂英さんという美しい娘さんから説明していただいたが、ほとんどわからなかった。しかし、太鼓の叩き方、竹筒の鳴らし方など、いろいろと勉強できた。お礼に日本の民族舞踊を披露。

夕方ジノ一族の村に別れを告げ、シーサンパンナに戻り、タイ族の人のお宅に招かれてタイ族のエスニック料理で歓待を受ける。謹厳な孫強先生がやおら立ち、とっておきの愉快的踊りを披露してくださった。

15日、シーサンパンナ歌舞団において、約40名の団員の皆さんに民族舞踊を指導。夜、景洪劇場で日本の民族舞踊を披露。観客数は約2000、熱気あふれる舞台となり、何度もアンコールで呼び戻された。最高の友好交流になり得たものと信じている。昼間お会いした歌舞団の人達に、美しい熱帯の花束をいくつもプレゼントしていただいた。

ジノ一族の唄をうたってくれた何桂英さんを取材。



思茅民族歌舞団団長  
岩宰先生と黛節子。



ジノ一族との  
友好公演後のひととき。



16日、紅旗会堂で公演。この劇場は景洪劇場よりやや小さいが、やはり満員の盛況であった。思茅地区歌舞団の人々（タイ族、ハニ族、サニ族などの少数民族の人々を含む）が、象脚鼓などの伴奏による輪踊りを踊ってくださった。2重3重の輪の中にいつか私も入って踊っていた。それは夢のように楽しい経験であった。歌舞団団長の岩宰氏の見事な演出に心から感謝したい。



タイ族の高床式の家で  
踊りの披露をする孫 強先生。

18日、昆明へ戻り、雲南民族展覧会に招待され、少数民族の風俗習慣、生活用具、衣服、建築などについて勉強した。展覧会場に設営された舞台で、タイ族、イ族、ワ族、ハニ族、ナシ族などの歌と踊りを見た。

19日、ホーパオ節を見る。ホーパオ節は雲南省路南県石林のサニ族の祭りである。この日（旧暦6月24日）1日しか行われない。もとは水田の周囲を松明を持ってまわる虫払いの農作業に発するものといわれ、祖先の魂を呼びながら田をめぐる。とはいえ、現在では、美しい民族衣裳をつけて、御馳走を食べ、笑いさざめきながらの楽しい祭りである。松明が人数より少ないため、その取り扱いで大変な騒ぎであった。

21日、雲南省昆明分会歌舞団を訪問。50人ほどの団員に日本の民族舞踊を教授。午後、黛民族舞踊団公演。夜、劉金吾氏、孫強氏、周培武氏らと歓談。

22日、雨の昆明に別れを告げ、帰国の途につく。雲南分会の方々の御厚意により、今回も実り豊かな取材旅行となった。とりわけ劉金吾氏、周培武氏、馬文静氏ほか歌舞団の皆さん、通訳の梁爽さんなどには言葉に尽くせぬほどお世話になった。この場をかりてお礼を申し上げたい。

# 黨民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黨民族舞踊文化財団は、わが国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和六十一年三月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡回公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者(音楽、振付けを含む)、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および東南アジア諸国の民俗芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し(将来は資料館を設置して一般の利用に供することを計画しています)、また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、東南アジア諸国の民俗芸能伝承者たちとの交流等、幅広い国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民俗芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的を御理解くださり、各界の方々

の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には下記の通り賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げる次第です。

## (財) 黨民族舞踊文化財団賛助会員規程

一、賛助会員とは、この法人の主旨目的に賛同して入会くださった個人・法人(団体)の方々の名称です。

二、会費寄付の内容は下記の通りです(但し、年間会費として扱わせていただきます)。

### ア、個人の場合

|        |       |
|--------|-------|
| 個人会員   | 五千円以上 |
| 特別個人会員 | 十万円以上 |

### イ、法人の場合

|            |       |
|------------|-------|
| 法人(団体)会員   | 十万円以上 |
| 特別法人(団体)会員 | 百万円以上 |

## 三、賛助会員の特典

### ア、特別会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演会の切符御一名様御招待
- 2 「財団の宴」など種々の行事に御招待

### イ、会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演会の切符御一名様御招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛て、御請求くださいませ。領収書は、銀行にお振り込み下さいました後、お送り申し上げます。

## 63年度

## これからの事業予定

### ①中国雲南省少数民族舞踊発表会

6月13(月) 14日(火)

会場 草月ホール

昭和60年、62年の2回にわたり中国舞踏家協会雲南分会の招聘により、雲南省少数民族の多様性に富んだ明るく素朴な民族舞踊を取材いたしました。その成果を発表いたします。この発表会には、中国の著名な音楽家・思茅地区民族舞踊団団長の若幸氏ほかをお招きすることにしてあります。また、わが国民俗芸能の宝庫といわれる岩手県出身の歌手、千昌夫氏にも参加していただき、充実した公演にしたいと考えています。

### ②中国雲南地方の民族舞踊家を招聘

中国雲南地方の民族舞踊家五人を日本にお招きし、8月に開催される「みちのく祭」を中心にわが国の東北地方に残る民俗芸能や習慣などを現地で見たいいただき、日本の民族文化への理解を深めてもらいます。

また、わが国の民族舞踊関係者と「日中民族舞踊に関するセミナー」を開催し、相互理解を深めます。

さらに、「日中合同民族舞踊交流公演」を開催します。

(「みちのく祭」は、8月7～9日の3日間北上市で開催され、70の団体が参加して岩手県の代表芸能「鬼剣舞」「鹿踊り」「田植え踊り」等々を競演します。)

## 財団の歩み

昭和60年12月10日

財団法人設立発起人会が「黨アートサロン」で開かれる。財団役員、寄付行為、事業計画、収支予算など財団設立の認可申請書に必要な書類を決める。

昭和61年2月27日

文部大臣海部俊樹殿に財団法人黨民族舞踊文化財団設立許可申請書提出。

昭和61年2月18日

第一審査許可を受け追加参考資料を至急作成提出。

昭和61年3月25日

財団法人黨民族舞踊文化財団民法第34条の規定により文部大臣より認可される。

昭和61年4月9日

東京法務局に財団法人設立の登記申請をする。

昭和61年4月18日

文部大臣宛に設立登記完了届提出。

昭和61年5月8日

第一回理事会開催。財団法人黨民族舞踊文化財団の設立経過報告、評議員の選任、賛助会員規

程についての協議文書提出。

昭和61年5月10日

日中文化交流事業開催のため国際交流基金に後援名義使用請願書提出。

昭和61年5月12日

日中文化交流事業開催のため文化庁後援名義使用請願書提出。

昭和61年5月15日

国際交流基金より後援名義使用許可を受ける。

昭和61年5月21日

文化庁より後援名義使用許可を受ける。

昭和61年5月20～31日

財団主催最初の日中文化交流事業を中国舞踏家協会雲南分会副主席劉金吾先生他3名招いて開催。5月20日、訪日代表団歓迎レセプション。同時に財団法人黨民族舞踊文化財団の設立レセプションも開催。財団役員、来賓他100人を招いて盛大に行われる。

昭和61年6月6日

評議員就任依頼文書の発送。

昭和61年11月15日

第一回評議員会の開催通知発送。

昭和61年12月5日

第一回評議員会開催。評議員の

紹介。財団法人設立経過及び現在までの事業報告。今後の事業の重点事項に就いての協議。

昭和62年1月7日

新春の宴開催。

昭和62年3月

第一回「民族舞踊文化に関する研究会」に対する御祝辞の依頼文書を文化庁へ発送。

昭和62年3月27日

第一回「民族舞踊文化に関する研究会」に対する後援名義使用についての依頼文書を国際交流基金へ発送。

昭和62年4月1日

文化庁長官より祝辞を受ける。国際交流基金より後援名義使用許可。

昭和62年4月17～18日

財団法人黨民族舞踊文化財団第一回民族舞踊文化に関する研究会を「剣」と題して、学習院大学教授黨弘道先生の剣に関する講演と日本・中国・韓国の舞踊と比較研究の会を開催、財団役員他関係者多数、盛大のうちに終わる。

昭和62年6月3日

第二回理事会開催。61年度事業報告及び収支決算について、62

年度事業計画及び収支予算の変更について報告。

昭和62年6月3日

第二回評議員会開催。理事会と評議内容同じ。

昭和62年6月5日

文化庁文化財調査官星野弘氏「雲南の民間舞踊調査報告」講演会開催。

昭和62年7月11～23日

中国舞踏家協会雲南分会の招きにより財団法人黨民族舞踊文化財団との舞踊学術交流の旅に出发。昆明・思茅・西双版纳他ジノ一族の部落取材等研究旅行実施。

昭和62年8月28～29日

財団法人黨民族舞踊文化財団第二回民族舞踊文化研究会を開催。旧暦七夕の日は今年は8月30日になるのでこの日を選ぶ。「星の宴」と題して、1.七夕の星一青山学院大学教授・五島ブラネタリウム学芸委員原恵先生2.陰陽五行から見た七夕学習院評議員吉野裕子先生の講演と、七夕踊り「星の夕暮れ」として沖繩の言葉で演ずる、舞踊劇を発表。好評盛大に終わる。

昭和63年1月7日

新春の宴開催。